令 和 4 年 度

日野市立教育センター紀要

第 19 集

日野市立教育センター

目 次

あいさつ

「教育センター紀要第 19 集の発刊にあたって」日野市立教育センター所長　長﨑　将幸･･･ 1

令和 4 年度　教育センターの部・係〈担当〉 ･･････････････････････････････････････ 2

A　調査研究部の事業

1　教科等教育係　　「理科教育推進研究」 ･･････････････････････････････････････ 3

2　ふるさと教育係　「郷土教育推進研究」 ･･････････････････････････････････････ 9

3　教育資料･広報係 ･･ 18

B　研修部の事業

教職員研修係 ･･ 19

C　相談部の事業

学校生活相談係 ･･ 23

編集後記 ･･ 33

教育センター紀要　第19集の発刊にあたって

日野市立教育センター所長　　長　崎　　将　幸

令和４年度は、「未来に向けた学びと育ちの基本構想（第３次日野市学校教育基本構想）」の４年目を迎えました。学校現場では、「一律一斉の指導から脱却し、一人一人を捉えたその子に合った指導をし、教材を工夫し、学習活動を通して子供たちが、学び方を身に付けられる授業をつくっていくこと」「自分たちで考え語り合いながら生み出す学び合いと活動、つまり、協働的な学びを作り上げていく」ということを目指して、創意工夫ある教育活動を推進しています。

今年度の教育センターは、「子供たちが主体性をもち学びを進める力を育むため、現場とつながり、授業力の向上を支える教育センター」「現場に役立つ教育センター」を目標とし、一歩でも前に進めるために、「できることをやる。柔軟に対応する。」という視点をもって、事業を推進してまいりました。

教科等教育係の理科教育推進研究では、「ひのっ子が主体となる理科教育」をテーマに研究を進めてまいりました。小学校の理科教育が充実するように、理科教育コーディネーターが中心となり、本年度も数多くの資料提供や教材開発、出前授業などの取組を実施しました。

ふるさと教育係の郷土教育推進研究では、研究主題を「郷土への愛着を高め、地域と共に生きようとするひのっ子の育成」とし、授業を通して実証的に研究を進めました。昨年度に続き、ふるさと文化財課、図書館、中央公民館と連携して、教材研究や授業づくりを行いました。今年度は、新たな試みとしてこれまで積み重ねた実践を検索するシステムを構築しました。

研修部では、若手教員の指導力の基礎づくりとして、１年次から３年次までの 90 名の若手教員に対して、授業観察を通し、個々の課題に応じ、実態を捉えた指導・助言にあたりました。授業力の向上や子供たちの主体的な学びの指導方法の育成に向け、その教員の良さを大切にして本人に寄り添った指導・助言を行いました。新規採用の教員が若手教員育成研修の期間である３年間を経て大きく成長する姿は、これからの学校教育を支えていく人材としての頼もしさを感じています。

わかば教室では、主体的な学びの活動を重視し、わかデミーやわかばタイム、ソーシャル・スキル・トレーニング、e ラーニングなどの取組を進めてまいりました。活動の中では、通室する子供たちと指導員が丁寧に関わりながら、興味・関心に応じた学びができるように取り組んできました。通室者が増加傾向にある中でも一人一人に応じたきめ細やかな支援を行うとともに関係機関との連携にも力を入れてきました。

令和４年度も昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症対策は続いているところですが、感染症対策を講じた上で通常の教育活動に戻りつつあります。教育センターとしても予定していた事業がほぼできるようになりました。教育センター活動報告・調査研究発表会も久しぶりに教育センター関係者と学校関係者に参加していただき対面で行うことができました。あわせて、教育センターの活動を様々な方に広く知っていただくために、発表会当日の動画と発表資料を教育センターの Web ページにも期間限定で掲載をいたしました。

今後も学校現場を支える教育センターとして、所員一同、努力してまいりますので、ご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。

令和４年度　教育センターの部・係〈担当〉

所　　長	（令和４年11月まで）	正　留　久　巳
	（令和４年12月から）	長　﨑　将　幸
主任研究員　　教育部参事		長　﨑　将　幸
教育センター担当　統括指導主事		馬　場　章　夫
教育センター担当　指導主事		宮　崎　友　和
事　務　長		田　中　　勉

調査研究部	◆印（主任）　　○印（係主担当）	
●教科等教育係	理科教育推進研究	◆沼　田　忠　晶
〃		千　葉　　正
●ふるさと教育係	郷土教育推進研究	◆高　橋　清　吾
〃		尾　形　　斉
●教育資料・広報係	（令和４年11月まで）	正　留　久　巳
〃		千　葉　　正
〃		竹　山　弘　志
〃		田　中　　勉
研　修　部		
●教職員研修係		◆千　葉　　正
〃		○尾　形　　斉
〃		○竹　山　弘　志
相　談　部		
●学校生活相談係	わかば教室（教室運営）	◆須　藤　昭　人
〃	〃　　〃	森　本　友　明
〃	〃　　〃	大　類　研　治
〃	〃　　〃	池　本　ユウ子
〃	〃　　（指導員）	藤　原　千　恵
〃	〃　　〃	塚　﨑　昌　代
〃	〃　　〃	星　野　ひとみ
〃	〃　　〃	椹　　真　幸
〃	〃　　〃	大津谷　敦　子
〃	わかば教室カウンセラー	加　藤　枝利子
〃	〃	清　水　一　広
〃	登校支援	酒　田　百合枝
事　務　部		
●事務職員		宮　澤　功　一
〃		小　俣　裕　之
用務員		守　屋　　敦

A　調査研究部の事業

1　教科等教育係

—理科教育推進研究—

理科教育推進研究委員会

Ⅰ　研究テーマ

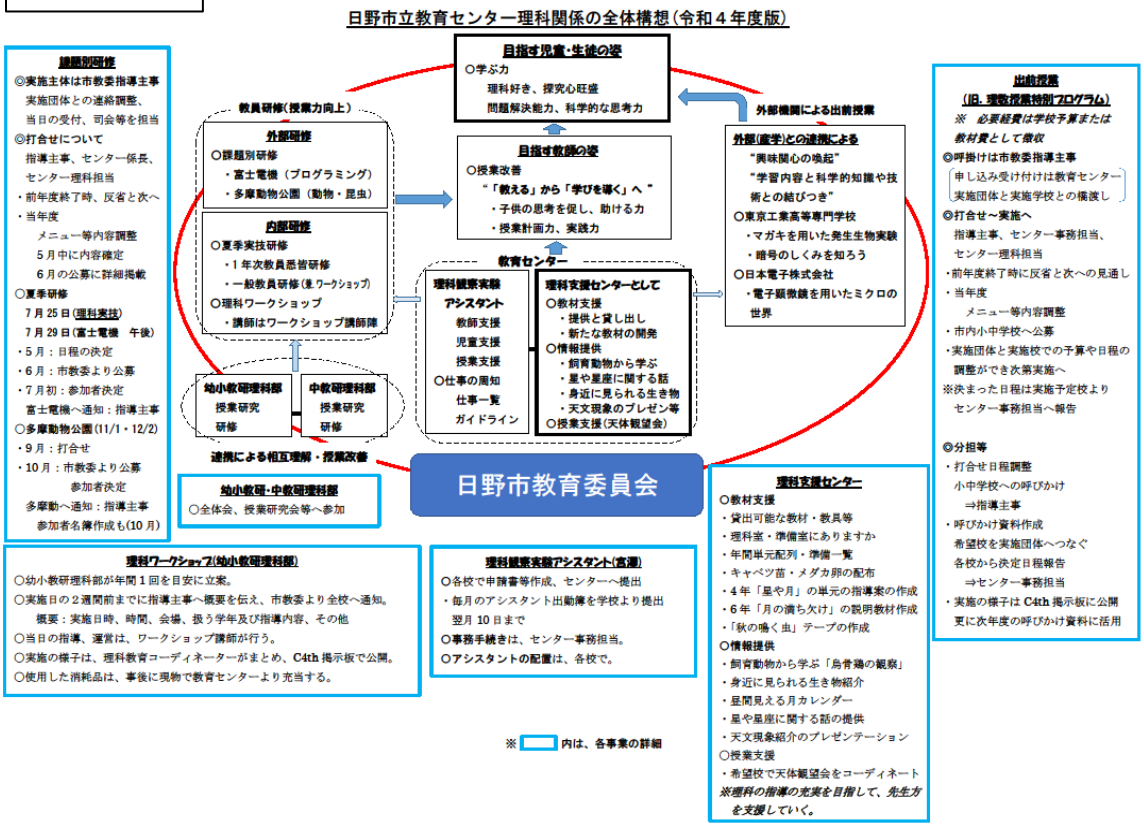
「ひのっ子が主体となる理科教育」

Ⅱ　研究の趣旨

子供一人一人が、自然の事物・現象に興味・関心をもって親しみ、自ら見いだした問題を思考力、判断力、表現力を活用して探究することを通して、問題解決していく子供を育てるために、教員が授業において「教える」から「学びを導き」、子供一人一人の力を引き出し、子供が主体となる理科教育の推進について研究する。

Ⅲ　研究の構想

研究構想図



理科教育推進に関する取組をまとめ、図に表したのが、この「研究構想図」である。理科支援センターとしての取組を中心に、教員研修や外部機関による出前授業を、日野市教育委員会や幼小教研理科部・中教研理科部との連携の中で取り組んだ。学校、教員を支援することによ

って、研究テーマである「ひのっ子が主体となる理科教育」が推進できるものと考えた。
今年度実施できた活動について以下に報告する。

Ⅳ　実践

１　理科教育コーディネーターとしての取組の報告

（１）生命尊重の心と観察力、分析力、考察力の育成のために

①『飼育動物から学ぶ　「烏骨鶏の観察」』シリーズ　200 回以上の発行

・観察して分かったことをもとに、具体的な観察内容や分析、考察したこと等を発信してきた。

・烏骨鶏１羽１羽の特徴や様子、観察を通しての気付きや考察を発信し続けることで様々なことが多面的に深く分かってくることを具体的に伝えることができた。

・「いのち」を大切にすることにつなげることができたと考えている。

令和４年１２月２１日
日野市立教育センター
理科教育コーディネーター
沼田　忠晶

飼育動物から学ぶ　烏骨鶏の観察　126

午後２時頃になり、５羽のうち４羽のメスたちが、床から砂場に移動し、ひと休みし始めました。残りの１羽は、まだ餌を食べています。砂場に移動したメス４羽のうち３羽は、立ったまま顔をつきあわせています。顔を接近させて、何かお互いにコミュニケーションをとっているような姿です。まるで、人間が３人で寄り集まって、顔をつきあわせて何か相談しているような姿と瓜二つです。

烏骨鶏たちは、集まって座っている時も、顔を寄せ合っている姿を見かけます。このお互いに顔を接近している態勢は、何かあれば直ぐくちばしで突っつかれてしまう距離なのに、これだけ顔を近付けるというのは、信頼関係があり、この態勢が安心するのかなあと思いました。

さて、この３羽の立ったまま、顔を寄せ合っている様子がとても印象的で見ていると、そのうちの１羽が眠くなってきたのか、瞼が半目になったり、静かに開いたりを繰り返しています。かなりうつらうつらしている感じです。私は、烏骨鶏は両脚で立ったままの姿勢でも寝るんだなと思いました。

その瞼の閉じ方ですが、人間は「上から下に」閉じると思いますが、烏骨鶏の場合は「下から上に」閉じることが、観察を通して分かりました。何度も見て確かめましたが、「下から上に」閉じていました。この瞼の閉じ方は、烏骨鶏だけなのか、鳥類全体にいえるのかは分かりません。

このメスは、うつらうつらしていましたが、何とか起きていました。しかし、やはり眠いのか、今度はくちばしを大きく開いて欠伸をしました。私は、今までも何度か烏骨鶏がくちばしを大きく開けて、静かに欠伸をする仕草を見たことがありました。

そして、思ったことがありました。メスたちは、夜だけでなく、昼間に昼寝をするのかもしれないなということです。夜は、みんな寝床にジャンプして寝ますが、昼間は寝床ではなく、砂場に集まって寝る(あるいは、休息する)のではないかと思いました。自然にいる野鳥は、外が明るくなってくると、早朝から美しい声で鳴くことが多いので、烏骨鶏も起きるのが早いのではないかと思っています。そのため、昼頃には、昼寝をしたいような状態になるのではないかと思いました。

餌もお腹いっぱい食べられて、そのこともあって、ちょうど眠くなってくるのかもしれません。

昼頃は、朝早くから動き回ったことと、お腹いっぱい食べたことで、眠くなり(あるいは、休息をとりたくなり)、夜は、暗くなり、目が見えにくくなるので、規則正しく寝床で寝る、そんな烏骨鶏の一面が見えたように感じました。

夕方になり、寝る態勢に入った５羽のメスの様子
この日は、１段目に４羽、２段目に「いつも一人ぼっちで寝ている」メス１羽で寝ることになりました。

令和５年１月５日
日野市立教育センター
理科教育コーディネーター
沼田　忠晶

飼育動物から学ぶ　烏骨鶏の観察　141

今日は、お天気のよい日でした。午後２時４０分頃から烏骨鶏の観察をしました。飼育小屋に行くと、メスたちはとても喜んでドアの所に集まって来ました。そして、５羽のうち２羽が中庭に出ていきました。この２羽は、「以前、ずっと砂場の片隅で寝ていたメス」と「いつも一人ぼっちで寝ているメス」でした。約２週間、砂場の片隅でじっとした生活をしていましたが、今は元気になり、真っ先に外に出て、土を両脚で掘って出てきた植物の種やミミズなどの小さな虫などを食べています。

この時間は、直射日光も斜めから当たり、烏骨鶏の影が約１m伸びていました。このぐらいの直射日光だと烏骨鶏はあまり気になならないようで、２羽は元気に外の生活を楽しんでいました。時に、「長らく砂場で過ごしていたメス」は、両脚を「チョン、チョチョ、チョン」のリズムで活発に動かしながら、土を掘り、中から出てきた種や虫などを食べていました。私は、このメスが土を掘っている様子を近くで観察することにしました。ひたすら、「掘っては、餌を探して食べる」を繰り返しています。メスが一生懸命土を掘るため、土が月面のクレーターのように穴が開いていきます。私は、このメスのお陰で、土の中の様子がどうなっているのか観察することが出来ました。時に、種だけでなく、小さなミミズが掘り起こされることがありました。ミミズは、急に地面に出されたため、体をくねくねさせて、吃驚しているように見えました。しかし、それもつかの間、烏骨鶏にあっという間に食べられてしまいました。私は、少なくとも、このメスが土を掘って３匹の小さなミミズを見つけ、それを食べてしまう場面に遭遇しました。

私は、ミミズなどの生き物の餌を与えてきませんでした。しかし、烏骨鶏は今回のミミズだけでなく、アリや小さな虫の幼虫等も食べてしまうところを今まで見てきました。

「いつも一人ぼっちで寝ているメス」は、外に出ても、私の傍で土を掘ったり、草の葉を食べたりすることが多いです。私がしゃがんで観察していると、私の膝の下に入ってきます。私の靴を食べるのではないかと思うくらい私の足元で土を掘って餌を探したり、草の葉を食べたりします。時に、私の横や後ろに回ったりしますが、私の傍にいることを好んでいるようです。時には、私の両足の間を体を縮めながら通ったりしました。私のいる場所を目で確認して、近寄ってくるように思っています。ある時、このメスは顔の前方をゆっくり飛んでいた小さな虫を見つけると、空中であっという間にくちばしで捕まえて食べてしまいました。烏骨鶏は、空中を飛んでいる虫も瞬時に捕まえて、」食べてしまうんだと知り吃驚しました。
烏骨鶏も、様々な「いのち」あるものから栄養をいただいて生きているんだなと思います。

時間が経って、日がさらに傾き、直射日光が当たって出来る烏骨鶏の影も、約１．５mに伸びました。段々と、日差しが弱まってくると、烏骨鶏たちも外に出やすいようです。そして、小屋の中にいた残りの３羽のうち、２羽が中庭に出てきました。

すると、中庭で餌を食べていた「一人ぼっちで寝ているメス」が急に、少し動揺し始めました。

※続きは、１４２回です。

烏骨鶏は、脚にも毛が生えています。
活発に外に出てくるメスです。

（２）体験的な学習の推進のために

①「天体観望会の取組」のコーディネート

・日野市内小学校ＰＴＡ主催で、天体観望会が３回企画、実施された。当日の天候に応じて、星空のお話と望遠鏡等による見え方体験が実施された。

・専門家や団体等と連携、協力していただくことで、望遠鏡や双眼鏡等を準備していただくことができた。

・各小学校に普及していくには、「ＰＴＡ主催」「夜間開催」等という課題を解決していくことが大切である。

（３）体験を通して、より科学的な見方・考え方を育むためのきっかけづくりのために

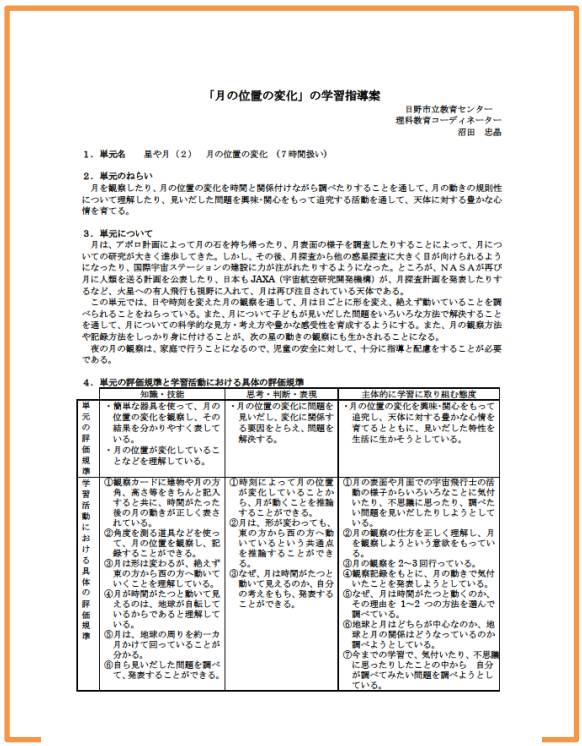
①「天文分野の教育用プレゼンテーション」「星や星座に関する話」の作成、発信

・『七夕のお話』『自分の星座づくりにチャレンジ』『北極星の探し方』『満月の模様の紹介』『太陽系の惑星がもつ衛星の数の移り変わり』『私たちは、宇宙のどこにいるの

だろうか』『11 月 8 日の皆既月食』『火星の最接近』等の星空、宇宙についての情報をプレゼンテーションや文書にまとめることで、学校全体で、各学級でご活用いただけるように工夫した。

（4）子供が主体となる理科授業のために

①小学校第 4 学年「星や月」の単元の「月の位置の変化」の指導案の開発



「月の位置の変化」の学習指導案

日野市立教育センター
理科教育コーディネーター
沼田　忠晶

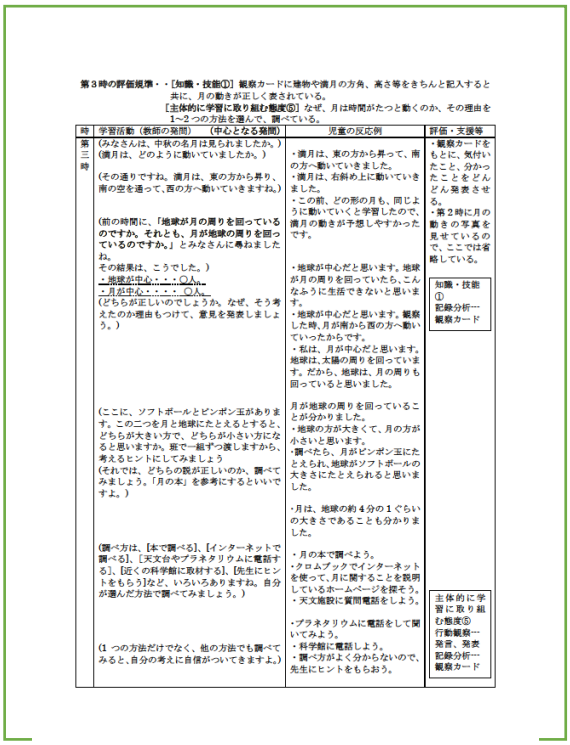
1．単元名　　星や月（2）　月の位置の変化（7 時間扱い）

2．単元のねらい
月を観察したり、月の位置の変化を時間と関係付けながら調べたりすることを通して、月の動きの規則性について理解したり、見いだした問題を興味・関心をもって追究する活動を通して、天体に対する豊かな心情を育てる。

3．単元について
月は、アポロ計画によって月の石を持ち帰ったり、月表面の様子を調査したりすることによって、月についての研究が大きく進歩してきた。しかし、その後、月探査から他の惑星探査に大きく目が向けられるようになったり、国際宇宙ステーションの建設に力が注がれたりするようになった。ところが、ＮＡＳＡが再び月に人類を送る計画を公表したり、日本も JAXA（宇宙航空研究開発機構）が、月探査計画を発表したりするなど、火星への有人飛行も視野に入れて、月は再び注目されている天体である。
この単元では、日や時刻を変えた月の観察を通して、月は日ごとに形を変え、絶えず動いていることを調べられることをねらっている。また、月について子どもが見いだした問題をいろいろな方法で解決することを通して、月についての科学的な見方・考え方や豊かな感受性を育成するようにする。また、月の観察方法や記録方法をしっかり身に付けることが、次の星の動きの観察にも生かされることになる。
夜の月の観察は、家庭で行うことになるので、児童の安全に対して、十分に指導と配慮をすることが必要である。

4．単元の評価規準と学習活動における具体の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
単元の評価規準	・簡単な器具を使って、月の位置の変化を観察し、その結果を分かりやすく表している。 ・月の位置が変化していることなどを理解している。	・月の位置の変化に問題を見いだし、変化に関係する要因をとらえ、問題を解決する。	・月の位置の変化を興味・関心をもって追究し、天体に対する豊かな心情を育てるとともに、見いだした特性を生活に生かそうとしている。
学習活動における具体の評価規準	①観察カードに植物や月の方角、高さ等をきちんと記入すると共に、時間がたった後の月の動きが正しく表されている。 ②角度を測る道具などを使って、月の位置を観察し、記録することができる。 ③月は形は変わるが、絶えず東の方から西の方へ動いていくことを理解している。 ④月が時間がたつと動いて見えるのは、地球が自転しているからであると理解している。 ⑤月は、地球の周りを約一カ月かけて回っていることが分かる。 ⑥自ら見いだした問題を調べて、発表することができる。	①時刻によって月の位置が変化していることから、月が動くことを推論することができる。 ②月は、形が変わっても、東の方から西の方へ動いているという共通点を推論することができる。 ③なぜ、月は時間がたつと動いて見えるのか、自分の考えをもち、発表することができる。	①月の表面や月面での宇宙飛行士の活動の様子からいろいろなことに気付いたり、不思議に思ったり、調べたい問題を見いだしたりしようとしている。 ②月の観察の仕方を正しく理解し、月を観察しようという意欲をもっている。 ③月の観察を 2～3 回行っている。 ④観察記録をもとに、月の動きで気付いたことを発表しようとしている。 ⑤なぜ、月は時間がたつと動くのか、その理由を 1～2 つの方法を選んで調べている。 ⑥地球と月はどちら が中心なのか、地球と月の関係はどうなっているのか調べようとしている。 ⑦今までの学習で、気付いたり、不思議に思ったりしたことの中から、自分が調べてみたい問題を調べようとしている。



第３時の評価規準・・［知識・技能①］観察カードに植物や満月の方角、高さ等をきちんと記入すると共に、月の動きが正しく表されている。
［主体的に学習に取り組む態度⑤］なぜ、月は時間がたつと動くのか、その理由を 1～2 つの方法を選んで、調べている。

時	学習活動（教師の発問）（中心となる発問）	児童の反応例	評価・支援等
第三時	(みなさんは、中秋の名月は見られましたか。) (満月は、どのように動いていましたか。) (その通りですね。満月は、東の方から昇り、南の空を通って、西の方へ動いていきますね。) (前の時間に、「地球が月の周りを回っているのですか。それとも、月が地球の周りを回っているのですか。」とみなさんに尋ねましたね。 その結果は、こうでした。) ・地球が中心・・・・○人。 ・月が中心・・・・○人。 (どちらが正しいのでしょうか。なぜ、そう考えたのか理由もつけて、意見を発表しましょう。) (ここに、ソフトボールとピンポン玉がありますね。この二つを月と地球にたとえるとすると、どちらが大きい方で、どちらが小さい方になると思いますか。班で一組ずつ渡しますから、考えるヒントにしてみましょう (それでは、どちらの説が正しいのか、調べてみましょう。「月の本」を参考にするといいですよ。) (調べ方は、[本で調べる]、[インターネットで調べる]、[天文台やプラネタリウムに電話する]、[近くの科学館に取材する]、[先生にヒントをもらう]など、いろいろありますね。自分が選んだ方法で調べてみましょう。) (1 つの方法だけでなく、他の方法でも調べてみると、自分の考えに自信がついてきますよ。)	・満月は、東の方から昇って、南の方へ動いていきました。 ・満月は、右斜め上に動いていきました。 ・この前、どの形の月も、同じように動いていくと学習したので、満月の動きが予想しやすかったです。 ・地球が中心だと思います。地球が月の周りを回っていたら、こんなふうに生活できないと思います。 ・地球が中心だと思います。観察した時、月が南から西の方へ動いていったからです。 ・私は、月が中心だと思います。地球は、太陽の周りを回っています。だから、地球は、月の周りも回っていると思いました。 月が地球の周りを回っていることが分かりました。 ・地球の方が大きくて、月の方が小さいと思います。 ・調べたら、月がピンポン玉にたとえられ、地球がソフトボールの大きさにたとえられると思いました。 ・月は、地球の約 4 分の 1 ぐらいの大きさであることも分かりました。 ・月の本で調べよう。 ・クロムブックでインターネットを使って、月に関することを説明しているホームページを探そう。 ・天文施設に質問電話をしよう。 ・プラネタリウムに電話をして聞いてみよう。 ・科学館に電話しよう。 ・調べ方がよく分からないので、先生にヒントをもらおう。	・観察カードをもとに、気付いたこと、分かったことをどんどん発表させる。 ・第 2 時に月の動きの写真を見せているので、ここでは省略している。 知識・技能 ① 記録分析… 観察カード 主体的に学習に取り組む態度⑤ 行動観察… 発言、発表 記録分析… 観察カード

ア　指導の工夫

・月の学習に興味・関心をもたせるための導入の工夫として、「アポロ計画の中で、宇宙飛行士が月面を歩いたり、調査したりしているビデオや写真からの導入」「星や月が描かれた、世界の国旗の提示」等を通して、自ら問題を見いだすことができるようにする。

・太陽、地球、月の空間概念を理解させるための指導の工夫として、「太陽を運動会の約 1 ｍの大玉、地球を約 1ｃｍのビー玉、月を約 0.25ｍｍの粒に置き換えて提示」「各天体間の距離を、置き換えた約 1ｃｍの地球をもとに計算し、配置」するなどし、「地球や月の公転の様子や周期」を考えさせ、理解させる。

・月や星に親しみ、想像力を働かせながら、豊かな感受性を育成していくための指導の工夫として、「満月の模様」「中秋の名月」「月の成り立ち」「人間と、星が生み出した元素との関連」等について取り上げ、考えさせる。

・観察するときに、日によって、月の形や見える月の位置が変化していくことを分かりやすく理解させるための指導の工夫として、新聞の「太陽、月の『暦』欄」や国立天文台暦計算室の資料を活用する。

・子供が主体となって考え、探究していく学習への取組として、興味・関心に応じて「自らが見いだした問題を解決していく活動」を取り入れることを通して、問題解決力を育んでいく。

（5）小学校第 6 学年「月と太陽」の授業で、子供たち一人一人の理解を図るために

①「太陽、地球、月の大きさ」や「月の満ち欠け」の教材の作成

（6）体験を通して、より自然に親しむきっかけづくりのために

①「秋の鳴く虫」(18 種類)の鳴き声テープの作成

録音した鳴く虫・・・「エンマコオロギ」「ツヅレサセコオロギ」「ミツカドコオロギ」「ハラオカメコオロギ」「フタホシコオロギ」「スズムシ」「カンタン」「マツムシ」「クサヒバリ」「アオマツムシ」「カネタタキ」「シバスズ」「マダラスズ」「キリギリス」「ウマオイ」「クツワムシ」「セスジツユムシ」「ササキリ」の計 18 種類。

②「身近に見られる生き物」の紹介

「メダカから学ぶこと」「秋の鳴く虫」「自然から学ぶ　チョウとコオロギ」等

（7）理科支援センターとしての役割

①小学校第 5 年「メダカのたんじょう」の指導のために、「メダカの卵」の配布

今年度の教育センターでのメダカの産卵数は、995 個

希望する学校へのメダカの卵の配布数は、270 個

教育センターでのメダカの孵化数は、145 匹

②小学校第 3 学年「こん虫の育ち方」の指導のために、「キャベツの苗」の配布

日野市内幼稚園 1 園と日野市内小学校 16 校に配布

③教材の貸し出し

④「昼間見える月のカレンダー」の作成と情報提供

（8）旧理数授業特別プログラム　出前授業

①「日本電子株式会社」『電子顕微鏡を用いたミクロの世界』

小学校　5 校、中学校　1 校で実施

②「東京工業高等専門学校」『マガキを用いた発生生物実験』
『暗号のしくみを知ろう』小学校　3 校で実施

2　日野市教育委員会「教員課題別研修会」について

（1）7 月 29 日実施　教員課題別研修「富士電機研修」
『プログラミング体験授業』　micro:bit と MakeCode を用いたセンサーと自動化を例にした論理的思考訓練の授業実践
・意図をプログラムに実現させる過程において、問題解決にはステップがあることに気付くことができた。

（2）11 月 1 日実施　教員課題別研修「多摩動物公園研修」
①「虫が苦手な先生のための昆虫スキルアップ実習」
12 月 2 日実施　教員課題別研修「多摩動物公園研修」
②「動物の体のつくり：頭編」

・チョウを飼いながら、楽しくできる観察のやりかたを体験しながら学ぶことができた。
・動物や標本の観察を通して、くらしにあった動物の体のつくりを学ぶことができた。

３　理科観察実験アシスタント配置事業について

小学校第３学年～第６学年の理科学習において外部人材を活用することにより、学習指導要領の要点である観察・実験を重視した理科教育を実現する環境整備を図ることを目的として、理科観察実験アシスタント配置事業を小学校で実施した。

４　幼小・中教研との関わりについて

（１）研究授業の参観

（２）「理科ワークショップ」を「理科実技研修会基礎編」と兼ねて実施
「オリエンテーション」「虫眼鏡や顕微鏡を使って」「火の使い方」
「水溶液を使って」

Ⅴ　今後の課題

・理科支援センターとして開発し、発信した情報・資料が、学校でどのように使われ、また、使ってみてどうだったのかについて把握し、改善に活かしていくこと。
・研究、開発したことを広めていくために、どのような方法が有効であるか検討していくこと。
・クロムブックなど、ＩＣＴを活用した理科授業の在り方について研究していくこと。

Ⅵ　研究委員会委員

・委員長	日野第一中学校長	和田　栄治	
・副委員長	日野第四小学校長	三浦　寛朗	
・委　員	学識経験者	馬場　　武	元日野市教育委員会委員長職務代理者
	専属理科支援員	大澤　眞人	教育センターOB
	前理科教育コーディネーター	岩井　徳二	
	幼小教研理科部長	中村　優太	日野第七小学校教諭
	中教研理科部長	山田　絵里	大坂上中学校主任教諭
	幼小教研理科部	宮下　　淳	日野第四小学校主幹教諭
	幼小教研理科部	村松　綾乃	日野第六小学校主任教諭
	幼小教研理科部	伊野　嘉孝	南平小学校主任教諭
・担当指導主事		赤羽　利章	日野市教育委員会
・理科教育コーディネーター		沼田　忠晶	日野市立教育センター所員
		千葉　　正	日野市立教育センター所員

２　ふるさと教育係

―郷土教育推進研究―

Ⅰ　研究の構想

１　研究主題

第３次日野市学校教育基本構想を受け、令和４年度の研究主題を「郷土への愛着を高め、地域と共に生きようとするひのっ子の育成」とした。副主題は「グループの研究テーマ」として研究グループごとに設定した。

２　研究の手だて

（１）研究主題に迫るため、目標とする授業像を明らかにし、全員で共有した。（下表）

	郷土への愛着を高める児童 ➡	地域と共に生きようとする児童
授業で獲得が期待されること	・郷土の人・こと・ものを知る。 ・郷土を身近に感じる。 ・郷土の良さや素晴らしさに感動する。 ・郷土を誇りに思う。 ・郷土の大切さ、かけがえのなさを感じる。 ・郷土の人々とつながる。 ・郷土に育まれ、郷土の一員である自分を自覚する。 ※*「愛着」・・・心がひかれて、大切にしたいという思い*	・郷土を大切にしようと感じる。 ・郷土の営みに協力しようと思う。 ・郷土に貢献しようと思う。 ・郷土を元気にしようと考える。 ・郷土を発展させようと考える。 ・郷土に育まれ、そこで生活している自他を大切にしようと考える。 ・自己の郷土への思いを発信し、郷土を愛する仲間を増やそうと考える。 ・郷土で培われた自己の個性を生かし、将来他地域や外国においても自己の務めを果たす資質を育む。
育みたい学習態度	**～主体的・対話的で深い学び～** ・自ら課題、自ら解決…探究的に学習する。 ・人と関わることによって、考えを深めたり、新たな情報を得たり、協力・分担して研究したりする。 ・ものごとを自分との関わりで捉える。 ・学んだことを通して自己の生き方を考える。 ・学んだことを発信する。	

（２）全体を４グループに分け、グループごとにテーマを設けて研究した。

（３）授業実践を通じて実証的に研究を進め、メールを活用して指導案の検討を行った。

（４）１課２館（ふるさと文化財課、図書館、中央公民館、）と協働して授業づくりを行い、郷土学習の充実を図った。

（５）『郷土日野』指導事例集などの資料を効果的に活用して、地域の愛着を深め、児童が主体

的に問題発見や問題解決を行うようにした。

Ⅱ　郷土教育推進研究委員会の組織及び研究経過

1　研究組織

	役	氏　名	所　　属　　等
役員・事務局	所 長	正留　正巳 長﨑　将幸	教育センター　12/1～長﨑センター所長が就任
	委員長	斉藤　境栄	東光寺小学校長
	副委員長	秋田　克己	旭が丘小学校副校長
	指導主事	加藤　信秀	日野市教育委員会 学校課
	コーディネーター	高橋　清吾	教育センター
	所 員	尾形　　斉	教育センター
Aグループ	委員　世話人	柳井　大輔	日野一小・教諭
	委員	磯村　俊介	豊田小・教諭
	委員	林谷　健太郎	日野五小・教諭
	委員	若林　裕登	日野七小・教諭
	委員	関　　嘉晴	東光寺小・教諭
	委員	髙橋　秀之	ふるさと文化財課・学芸員
	顧問	小杉　博司	元日野第一小学校長
Bグループ	委員　世話人	河合　英恵	夢が丘小・主任教諭
	委員	渡辺　　大	日野四小・主任教諭
	委員	金谷　聡士	潤徳小・主任教諭
	委員	森田　捺美	日野八小・教諭
	委員	白川　未来	ふるさと文化財課・学芸員
	委員	長谷川　正	中央公民館高幡台分室
	顧問	吉野　美智子	元百草台小学校長
Cグループ	委員　世話人	澤久保　敦	平山小・教諭
	委員	田中　理紗子	第七幼稚園・教諭
	委員	北川　のぞみ	日野六小・教諭
	委員	小髙　圭太	南平小・教諭
	委員	浅野　佑弥	旭が丘小・教諭
	委員	飯田　千尋	多摩平図書館・司書
	顧問	會田　　満	元渋谷区立常磐松小学校長
Dグループ	委員　世話人	佐藤　健太	滝合小・主幹教諭
	委員	澤井　奈々子	日野三小・主任教諭
	委員	柿崎　麻理子	仲田小・主任教諭
	委員	村岡　竜二	七生緑小・教諭
	顧問	川島　清美	日野第三中学校長

郷土教育推進研究委員会のメンバーは、**委員長①、副委員長①、指導主事①、顧問④、幼稚園教員①、小学校教員⑰、ふるさと文化財課②、図書館①、中央公民館①**　及び**事務局**で構成されている。（○数字は人数）

各委員をA・B・C・Dの４グループに分け、それぞれに助言者として顧問が一人ずつ入った。グループのまとめ役「世話人」を、互選で決めた。

グループの話合い

日野用水フィールドワーク

２　研究経過

月	日	曜	事　項	内　容　等
5	17	火	第１回委員会	辞令伝達、計画確認、グループ協議
6	28	火	第２回委員会	夏季研修計画確認、グループ協議
7	27	水	第３回委員会	夏季研修（日野用水ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸ）
9	20	火	第４回委員会	指導案検討　グループ協議
10	25	火	第５回委員会	Ａ・Ｂグループ研究授業
11	29	火	第６回委員会	Ｃグループ研究授業
12	―	―	個別研究	研究の成果と課題を個々に考える
1	24	火	第７回委員会	研究発表会
2	13	月	第８回委員会	活動報告・調査研究発表会

◦夏季フィールドワークは全体で行動。午後講義演習
◦10 月は、2 会場で研究授業
◦１月は各グループの研究発表
◦２月は教育センター研究発表会で発表

Ⅲ　各グループの研究

１　Ａグループ

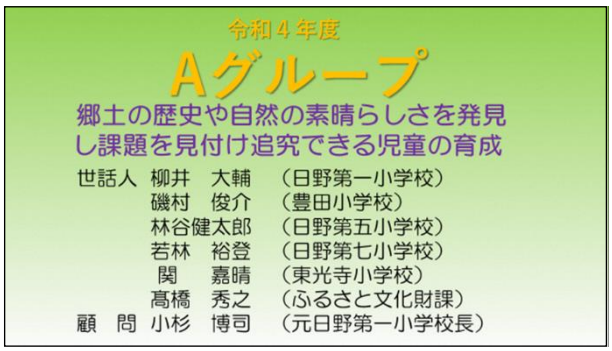
〔研究テーマ〕

「郷土の歴史や自然の素晴らしさを発見し課題を見付け追究できる児童の育成」

〔研究の内容〕

（１）４年社会科「郷土の発展に尽くす人々」
関　嘉晴(東光寺小)

◦3 年東光寺大根、梨園の学習を生かした。
◦玉川上水の学習と結び付けて学習した。
◦話合い活動で地域の良さを考えた。
◦東光寺地区の一員として自分たちができることを考え、新聞にまとめた。



（２）３年総合「広げよう！ぼくたち、わたしたちの世界」磯村俊介(豊田小)

◦豊田駅、中央図書館、商店等に行き地域のために自分たちができることを考えて活動した。

◦計３回の活動で地域の「人」「もの」「こと」に関する関心が高まり主体的に取り組んだ。

（３）３年総合「発見！地域の宝」林谷健太郎（日野五小）

◦町散策を繰り返し行うことで魅力を見付ける視野が広がった。

◦「人」「子供」「環境」「店」の児童が定めた４つの視点の色別シールを地図上の写真や気付いたことに張り付けた。蓄積した情報を学習用端末で活用し話合って深めた。

日野宿本陣を見学する児童

（４）４年総合「七小防災」若林裕登（日野七小）

◦社会科、理科の学習と日野市防災情報センターに行き一人一人がマイタイムラインを作成して家庭に持ち帰り共有した。日野市の防災に対して関心が高まった。

（５）３年総合「日野市のいいところ見つけ」柳井大輔（日野一小）

◦自分の住む地域の良さを見付け、それらを発信するために、実際に日野宿本陣、日野駅、仲田の森に行き、見たり、話を聞いたり、質問したりした。

◦日野市の生き物についてどんぐりクラブさんから話を聞き、仲田の森では自然に触れる体験をした。日野宿本陣見学では郷土資料館の学芸員から案内されて歴史を学び、活発に質問した。

◦郷土に対して様々な角度から興味関心が高まり、情報を集めて発信することができた。

〔成果と課題〕

〈成果〉

◦地域の良さを考えることで地域の一員としての自覚が芽生え、興味関心が高まった。

◦郷土の素晴らしさを発見して、学習したことを異学年や他クラスに発信ができた。

〈課題〉

◦市内の地域によって郷土資料と教材が変化するので、その場合の学習方法を検討する。

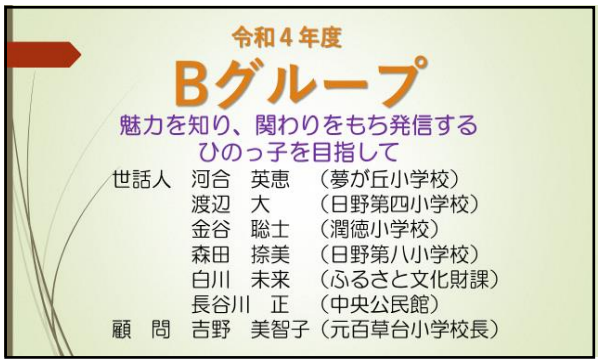
◦発信の仕方に差が出ないような方法を設ける必要がある。

２　Ｂグループ

〔研究テーマ〕

「魅力を知り、関わりをもち、発信するひのっ子を目指して」

〔研究の内容〕



（１）４年道徳「万願寺の渡し公園」

渡辺　大（日野四小）

◦万願寺の渡し公園の名前から考える。

◦名前の由来から歴史的価値に気付く。

◦身近な地域の良さを実感し郷土愛を育む。

（２）４年総合「身近な用水について考えよう」

森田　捺美（日野八小）

◦実際に用水の北側と南側の用水探検を行い、用水を見学して興味関心をもった。

◦見学して気付いたことを日野市の地図にまとめて貼っていった。

◦もっと知りたいことを班のテーマとし調べて班ごとに一つの新聞にまとめた。

（３）３年社会科「鉄道と共に発展した七生村」河合 英恵(夢が丘小)

◦鉄道の発展と共に七生地域の移り変わりを学習した。

◦身近な交通と地域との関係を知り興味関心がさらに高まり「もっと知りたい」と郷土への関心が高まった。

（４）５年道徳「水の郷　日野市」金谷 聡士（潤徳小）

◦日野市の魅力をあげさせた後「水の郷」認定証を見せた。

◦東京の２か所ある「水の郷」の１つが日野市であることに驚きの声があがった。

◦身近な河川や用水がきれいに保たれているのは多くの日野市民が関わっていることに改めて気付いた。

◦用水をきれいに保つ厳しいきまりがあったが、今はどうなっているかを比較して考えることで、きまりの必要性と河川と用水の関わり方を友達と意見交流することで考えを深めていった。

◦最後に学習用端末で友達と共有することで自分の考えをより深め郷土への愛着を高めた。

〔成果と課題〕

〈成果〉

◦身近な河川や用水など地域を題材とすることで、主体的に学習に取り組むことができた。

◦「誇りに思う」などの記述から児童の郷土への愛着の高まりが感じられた。

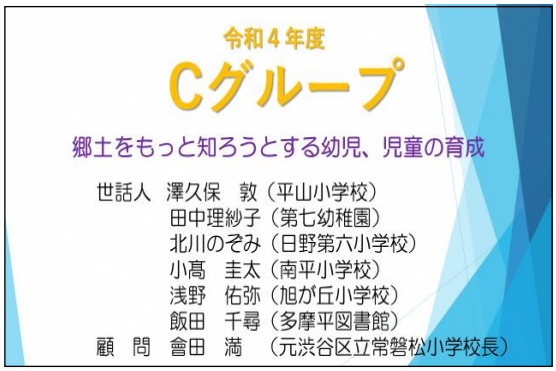
〈課題〉

◦考えを深めることができたが「発信する」という姿を達成できなかった。保護者など身近な人に学習内容を伝えるだけでも良い。

３　Ｃグループ

〔研究テーマ〕

「郷土をもっと知ろうとする幼児、児童の育成」



〔研究の内容〕

（１）４年総合「平山陸稲を育てよう」

澤久保 敦(平山小)

◦平山陸稲の栽培と観察する中で平山陸稲のことを知る。平山陸稲について自分が調べたいテーマを設定し、探究活動を行う。

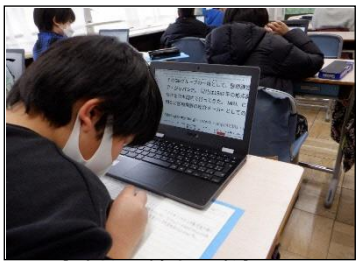
◦平山陸稲について関心を高め、良さや素晴らしさに気付くことができた。

（２）４年総合「Let’s Go！すずかけ米大作戦」

小髙 圭太(南平小)

◦農家の方から籾種の選別から、田植え、稲刈りまで教わりながら米作り体験を行った。

◦米作り体験授業を通して疑問や調べたい課題を見付け、調べたり、考えたりすることができた。



（３） ５年総合「地域の工業調査隊！」浅野 佑弥 （旭が丘小）

◦日野市と旭が丘の工場誘致の歴史、歌人巽聖歌を知り、グループに分かれて工場の調べ学習をする。

◦調べたことをまとめてマップを作り、発表した。

（４）幼稚園４歳児クラス「日野市に伝わる昔話を知ろう！」

田中 理紗子（第七幼稚園）

◦園児に日野市の昔話の紙芝居の他に園の用務員さんにも話してもらい関心を高めた。

◦家庭の関心を高めるように保護者参加の行事で日野市のお寺にまつわる昔話をした。

◦日野市の地図に昔話のイラストを貼り手作りマップとして掲示をした。

（５）５年総合「Change Food～身近な食品ロスについて考えよう」北川 のぞみ（日野六小）

◦理科と社会の学習につながる米作り体験と身近な食品ロスの削減に取り組んでいる農家の方、給食調理員、コンビニエンスストアの方など５人のゲストティーチャーから話を聞いた。

◦身近な食品ロスを減らす取り組みを自分の課題として考え班ごとに話し合って考えを深めた。

◦話合いを重ねてポスターを作ったり、無駄にしたりしないなど考えた解決方法に取り組んだ。

〔成果と課題〕

〈成果〉

◦地域人材を活用することで地域理解を促進することができた。

◦地域の未来を考えることで郷土への愛着を高めることができた。

◦身近な地域の課題を扱うことで自分事として受け止め主体的、対話的な話合い活動が行えた。

ゲストティーチャーの話

〈課題〉

◦各校ごとの活動の情報共有を行い自校の活動に生かしていくための方策を考える。

◦課題解決の方法だけでなく地域の人々の思いや願いを大切にして取り入れることを考える。

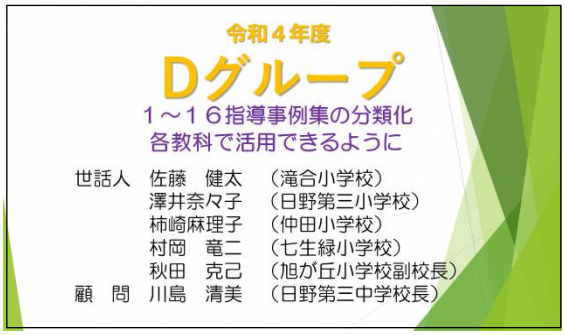
４ Ｄグループ

〔研究テーマ〕

「1～16 指導事例集の分類化 各教科で活用できるように」

〔研究の内容〕

Ｄグループ共同研究



◦Ｄグループでは、これまで蓄積されてきた指導事例集を各教員が各授業で扱うことができるように分類化を目指した。

◦夏季フィールドワークは参加された教員から講師の質の高い資料と豊富な情報量、教材化の視点をもった研修と充実した内容となって好評であった。

◦フィールドワークや、日野の様々な地域の素晴らしさを知る機会となった。

◦地域教材の授業化に難しさを感じている教員の悩みとして自校では使えない、活用の仕方が分からない等の題点が見られた。

◦教育センターWeb ページに 17 年間の膨大な指導事例集を公開している。教材研究をする教員はどこから読み始めたらよいか見当がつきにくい状態であった。

◦日野市の GIGA ネットワーク上に 17 年間分の指導事例集の「索引」を構築した。

◦検索システムは Google ドライブ内に PDF ファイルで保管されている 17 年間分の郷土教育指導事例集を活用する。

◦Google ドライブの共有ドライブ上の全校教職員共有フォルダに入る。次に郷土教育推進研究フォルダに入ると検索用郷土教育指導事例集を開くことができる。

◦調べたいキーワードを指定して検索することも可能にした。検索オプションに入る。次に検索場所を「検索用郷土教育指導事例集」を指定する。

◦調べたいキーワードを「含まれている語句」欄に入力する。“ダブルクォーテーション”で語句を区切ると複数のキーワード検索でも可能となる。

Web の郷土日野指導事例集

共有フォルダから事例集に

キーワード検索が可能に

〔成果と課題〕

〈成果〉

◦指導事例集を分類化し、検索システムを構築して各教科で活用できるようにした。

〈課題〉

◦構築したデータを各教員に公開して授業や教材研究で使用することを促進する。

◦新たな実践データの追加と写真データ等の検索も可能とする。

Ⅳ　郷土教育の充実を目指して（1 課 2 館との連携）

１　ふるさと文化財課の活動

ふるさと文化財課は、日野市の文化財や郷土資料をひとつの面で捉え「まちの物語」として日野に暮らす人々の日野への愛着を高めたり、子供たちのふるさと学習につなげたりすることを目指して活動をしている。

（１）郷土教育推進研究委員会に委員として出席し、授業づくりのための意見を話したり、郷土学習のための資料を提供したりした。

（２）郷土教育推進研究委員会夏季研修会のフィールドワークの参考資料の提供や付き添いを行った。

（３）「郷土資料館」「新選組のふるさと歴史館」の学芸員として小学校の社会科見学、中学校の地域学習に協力した。小学校の出前授業にも講師として昔の道具の実物を持参し授業で解説を行った。中学校とは職場体験の場として連携協力した。

夏季研修会で委員として

職場体験で作成した展示

出前授業の実物の一部

書架案内表示

２　図書館の活動

多摩平図書館では「日野市」をテーマとして日野市を紹介している本、日野市民の著作を 100 冊程集めて展示した。利用者が探し易いように日野市関係資料の案内として目印シール、書架案内を作成した。利用者から「この本に日野市が登場しているなんて知らなかった。読むのが楽しみだ」という感想をもらった。

作成した目印のシール

３　中央公民館の活動

中央公民館高幡台分室の職員が平山陸稲脱穀体験授業に向けてわかば教室の指導員にノコギリ鎌の持ち方、安全な扱い方の指導を行った。公民館の稲作事業「田んぼの学校」の農家さんから直接指導を受けた職員からの指導で安全にわかば教室の稲刈り体験を行うことができた。

４　平山陸稲栽培体験

ふるさと教育係では、「全国に普及した平山陸稲の発見者、平山村の林丈太郎の功績をしのび、日野から生まれた平山陸稲を伝える。」「わかば教室の児童・生徒が稲作体験をするとともに、郷土の歴史に親しむ。」ことをねらいとして、わかば教室の子供たちと平山陸稲栽培に取り組んだ。

平山陸稲のマーク
（ＪＡ東京中央会作成）

陸稲づくりの経過

月	日	活　　動　　等
5	10	種籾を水に浸けて沈んだものを選抜。浸種。
5	10	深さ５㎝のコンテナボックスに極小赤玉土を入れ苗床を準備。
5	11	播種。沈まなかった籾も播く。肥料 NPK＝8・8・8 を入れる。
6	16	コンテナボックス（大）に黒土を入れ、肥料を混ぜて代掻き。
6	16	田植え。コンテナボックスと地植えの比較に取り組む。
7 月下旬 9 月上旬		追肥２回。この間、陸稲はよく水を吸うので毎日水遣り。8 月 10 日、出穂を確認。特徴である紫色の長い禾（のぎ）が見える。
9	22	コンテナボックス、地植えの陸稲にスズメ対策の網掛け。倒れている陸稲を起こす。
10	20	稲刈り。はざ掛け。
11	24	脱穀。籾摺り。7 合以上の収穫。来年用の種籾を確保。
12	6	わかば教室収穫祭で試食。

紫色の長い芒をもつ平山陸稲

【子供たちの感想】

◦わかばの稲と郷土資料館の稲の生育が違った。まだ緑色の稲もあった。

◦鎌で稲を刈った時の感覚が気持ちよかった。

◦昔の人がいろいろな道具を作って、米を作ってると大変だなと思いました。また、いつも食べているごはんも大切に食べようと改めて感じました。

◦もちもちした食感が強くおいしかった。香りは自然の香りがした。

Ⅴ　郷土教育推進研究の成果と課題

成果

◦子供たちに郷土への関心や愛着を育てる授業を工夫できた。

◦第３次日野市学校教育基本構想の切り口で研究を進めることができた。

◦日野市の地域理解と郷土の歴史を深めることができ、教材開発力等委員自身の学びが深まった。

◦1 課 2 館の情報や助言が研究を深めることにつながった。

課題

◦郷土教育が目指す授業に向けての更なる指導方法と指導計画の工夫改善のための研究をする。

◦社会、総合的な学習の時間、各教科等で郷土教育に取り組めるように郷土教材を開発作成する。

◦指導事例集のデータベースを活用する研究をする。

３　教育資料・広報係

１　教育センターの Web サイト

（１）Web サイト運営の趣旨

①教育センター事業の広報の役割

教育センターでは、Web サイトを活用し、センター事業の活動内容や状況を広く学校関係者をはじめ、市民の方々にもお知らせし、多くの方々からのご理解をいただくことに努めている。

②教員の授業力向上のために

日野市内の小・中学校においては、教員用に１台ずつ、パソコンが配布されている。それらは、全てネットワークで結ばれており、各小中学校と教育センターとの情報交換や教育情報がパソコンを通して見ることができる。

（２）教育センターWeb サイトの主な内容

〇教育センターの概要

〇各係の活動内容・活動報告やわかば教室の活動等の様子

〇教育センターが作成した資料、教育センター要覧、教育センターだより、教育センター紀要等の掲載

〇郷土教育推進研究委員会作成の「郷土日野」指導事例集　第１集～16 集と「歩こう　調べよう　ふるさと七生」の掲載

２　「教育センターだより」の企画・編集

教育センターの事業活動の紹介とともに、成果の普及と事業の理解を図るため、年２回（令和４年度は７月と１月）発行し、市立幼稚園・小学校・中学校及び市内関係諸機関に配布している。

内容は各部事業のテーマや活動方針や計画、活動経過報告などである。広報紙として、より多くの方々に読んでいただけるように、さらに内容の充実と工夫・改善をすることが今後の課題である。

３　「教育センター紀要」の発行

教育センターの各部事業の成果と課題を明らかにし、その普及と活用の促進を図るために、年１回発行し、市立幼稚園・小学校・中学校及び市内関係諸機関に配布している。

B　研修部の事業

教職員研修係

若手教員の育成に取り組む教育センターの活動

Ⅰ　研修部教職員研修係の主な業務

・若手教員の１年次から３年次までの育成研修における授業観察と指導

・教育センターで行われる研修会や夏季教員研修の課題別研修会の受付業務や会場設営の支援

※　若手教員の授業観察及び指導は研修部所属の３人の所員（他の業務とも兼任）で分担して行った。

Ⅱ　若手教員育成研修

１　指導内容と人数

（4 月 27 日現在）

	指導内容	小学校	中学校	合計人数
１年次	年間３回の授業観察と指導の実施	21 名	5 名	26 名
２年次	年間１回の授業観察と指導の実施	21 名	10 名	31 名
３年次	年間１回の授業観察と指導の実施	25 名	8 名	33 名
	合計	67 名	23 名	90 名

※　１年次若手教員の人数には期限付任用教員の数を含む

２　１年次若手教員の育成

年３回、所員が１年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆指導の主な観点は、

・学習指導案が適切に作成されている

・児童・生徒と良好なコミュニケーションが図れている

・説明、発問は児童・生徒の理解度を把握しながら行い、分かりやすい

・板書は計画的で、学習の流れを示し、丁寧である

ICT 機器を適切に活用し、UD を考慮している

・教材研究を継続して行っている

・話合い活動の準備は適切に行われている

・児童・生徒に変容が見られる　　など

１年次では、良かった点や課題を示し、次の授業に向け改善策を話し合い、若手教員の指導にあたった。

１回目の授業観察の頃は、まだ児童･生徒の様子を見て説明や発問することが十分とは言えず､話も教員からの一方通行になる傾向が見られた。

しかし、校内での OJT による指導や本人の地道な努力もあり、3 回目の授業観察の頃には、基本的な説明・発問・板書のスキルが向上し、児童・生徒の表情や発言から理解の度合いを把握し、授業を進めようとするゆとりが見られるようになった。また、児童・生徒とのコミュニケーションも自然な感じで図れるようになり、先生としての存在感が増し、信頼関係の深まりを感じることができた。引き続き、教員としての基礎・基本を身に付けるた

め、話術を磨くこと、教材研究を続けること、児童・生徒理解を深め、人権感覚を大切にするように指導、助言した。なお、１回目の授業観察は教科で、２回目は道徳科、３回目は特別活動又は教科で実施し、ステップ教室担当教員は自立活動、小学校専科の教員はその教科で実施した。

（若手教員研修　１年次　２回目の様子）

３　２年次若手教員の育成

年１回、所員が２年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆指導の主な観点は

- １年次の成果と課題を踏まえ、ねらいが明確で授業の流れにメリハリがあり、山場を明確にした授業展開となっている
- 興味、関心を高め、理解を深める教材の開発を行い、ICT 機器の適切で効果的な活用と UD の取組をしている
- 教科指導における生活指導の在り方を理解し、授業規律やルールの徹底を行っている　など

２年次では、より実践的な指導力を付けるため、授業改善の助言を行った。

授業力の向上では単元のねらいをしっかりと理解し、山場を適切に設定した授業展開を目指すように話した。

また、次年度に向けて、児童・生徒の疑問や要求にも多面的に対応できる力を付けていくことが課題となることを、担当所員の豊富な経験を生かし、具体的な例を挙げながら指導にあたった。

４　３年次若手教員の育成

年１回、所員が３年次若手教員のいる学校を訪問し、授業観察及び指導を行った。

☆指導の主な観点は

- 主体的で、対話的で、深く考えさせる実践的な授業を目指し、問題解決型授業への取組が見られる
- 児童・生徒の疑問や要望などに、即座に対応できる授業を目指し、専門性を高めようとしている
- コミュニケーション能力を高め、表現力を育成する指導の工夫を行っている
- 外部との連携や学校の組織的な動きについて理解を深めている　など

３年次では授業力の向上が随所で見られるようになる。滑らかな導入、メリハリのある授業の流れ、ねらいに合致した山場があり、振り返りも簡潔に行われる授業展開を見ることが多い。また、児童・生徒の思考スピードに、教員の教えるスピードが合っていて、児童・生徒の理解度に応じた柔軟なやり取りができるようになってきている。

このような、３年次若手教員の大きな成長を目の当たりにする時、本人の日々の努力はもちろん、多くの先輩教員による地道で丁寧な指導があったことを強く感じるものであった。

５　若手教員育成研修　（２・３年次の校外における研修）

２年次は３回、３年次は２回、校外において研修（教育センター等における研修）が行われる。講師は研修会のテーマや目的に応じた各界の専門家が担当している。

右の写真は２年次の第１回目の様子である。

主な研修内容は「児童・生徒の主体的な学習を促す授業づくり」と「学級経営についての理解を深める」について。

「2 年次研修の様子」

右の写真は夏季に行われた３年次研修の１回目の様子である。研修内容は「外部機関との連携」と「保護者対応」についてで、それぞれの担当者や現場の先生からの講話があった。講話の途中にはロールプレイによる演習が行われ、日頃の経験を踏まえ、実践的な話合いが行われていた。

「3 年次研修、ロールプレイの様子」

Ⅲ　日野市教育委員会主催研修会への支援

日野市教育委員会が開催する日野市立幼稚園・小学校・中学校教員対象の研修会で、主に教育センターで行われる研修会と夏季教員研修の課題別研修会の受付・会場表示、会場設営等の支援を行った。

※　支援を行った主な研修

・生活指導主任研修会　　・教務主任研修会　　・研究主任研修会
・若手教員育成研修（1 年次）（教育センターを会場とした実施回数 5 回）
・若手教員育成研修（2 年次）（教育センターを会場とした実施回数 2 回）
・若手教員育成研修（3 年次）（教育センターを会場とした実施回数 1 回）
・理科実技研修　　・「多摩動物公園」研修（11 月実施）と（12 月実施）
・郷土教育推進委員会（7 月実施）　　など

Ⅳ　「若手教員の授業観察のためのガイドライン」について

【１】ガイドラインを設定する趣旨

（１）ガイドラインは、教育センターの研修部員による授業観察が学校と共通の認識の基に設定した視点に基づいて行なわれ、若手教員の授業力向上に資するものになることを目的とする。

（２）ガイドラインを設定することで、授業観察の視点を明確にし、事前に学習指導案をもとに授業観察の準備ができるようにする。

【２】研修部員との事前連絡及び授業観察のやり方

（１）授業観察日の取り決め　・・　研修部員と副校長とが連絡を取り、日時を設定する。日時の変更についても副校長を通して行う。

（２）学習指導案の提出　・・　学習指導案は、指導のための基本的資料である。提出にあたり、管理職や指導教員の指導を受け、授業観察一週間前には提出する。必要に応じて資料等も送付する。必要に応じて学習指導案の書き替えを指導・助言する。

（３）授業観察の指導　・・　指導時間は一単位時間とする。

（４）観察以降の指導　・・　授業観察以降も管理職に相談し、必要に応じて若手教員の事後指導をする。

【３】学習指導案作成の仕方　・・　学習指導案の書き方については、原則的には、「令和４年度東京都若手教員育成研修〈一年次（初任者）研修〉研修テキスト（小学校・中学校・義務教育学校）」（東京都教職員研修センター）を参考にする。

特別支援学級担当については、「令和 4 年度　東京都若手教員育成研修〈一年次（初任者）研修〉（特別支援学校・特別支援学級等）」（東京都教職員研修センター）を参考にする。

【４】若手教員の授業の指導における重点

（１）１年次　・・　授業における基礎的・基本的事項（学習規律等も含む）の資質・能力の育成を図ることを目的とし、学習計画に沿って授業を実施することができるように指導・助言する。

（２）２年次　・・　年間指導計画を踏まえ、単元及び一単位時間における児童・生徒に身に付けさせたい力を明確にした授業ができるように指導・助言する。そのために教材を工夫した実践的授業の指導力の向上を図る。

（３）３年次　・・　学校の教育課題の解決に向けた授業実践ができるように指導・助言し、あわせて、外部との連携や学校運営力等の課題解決力の伸長も図る。

【５】授業を観察する上での視点

【目標】①教科・科目等の目標→単元の目標→本時の目標が一貫しているか（指導観の把握）

②児童・生徒に身に付けさせたい力は明確か。

③本時の指導に、「児童・生徒観」が生かされているか。

【展開】④本時の目標を達成するための学習活動となっているか。

⑤授業における指導や学習活動のポンイト（山場）はどこか。

⑥「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が図られているか。

⑦時間の配分は適切か。

【学習活動に即した評価、指導上の配慮事項】

⑧本時の目標と評価項目との整合性があるか。

⑨児童・生徒の学習意欲を高める学習活動の工夫があるか。

⑩児童・生徒の学習の定着の状況に応じた、個別の指導の工夫が明記されているか。

令和２年４月１日　改訂

Ｃ　相談部の事業

学校生活相談係

Ⅰ　学校生活相談（わかば教室）の概要

ＩＣＴやＳＮＳなどの活用により社会のグローバル化が急速に進化・発展している中で、学校では長期欠席や登校しぶりなどが、青少年の健全な成長に関わる大きな課題となっている。これらの課題に対応するため、児童・生徒の学校復帰及び社会的自立のための支援や適応指導を行うことを目的として、平成 12 年４月１日「日野市適応指導教室設置要綱」が施行された。これに伴い、同年５月に日野市適応指導教室「わかば教室」が開設された。その後、平成 16 年４月「日野市立教育センター」設置に伴い、同センターの相談部（学校生活相談係）となった。そして平成 31 年４月１日「日野市わかば教室設置要綱」が施行されたことに伴い、その役割がますます重要になっていることを踏まえ、以下の事業を行ってる。

Ⅱ　わかば教室の事業

Ⅲの２で述べる児童・生徒が抱える要因・背景により、長期欠席状況にある児童・生徒を対象に、個々の状況に応じた支援・指導を通して、学校復帰に向けた支援とともに、将来の社会的自立を視野に入れた支援・指導を行う。

１　わかば教室の目的

（１）安心して過ごせる「学びの場（居場所)」とする

（２）「学校復帰」ができるようにする

（３）将来、「社会的自立」ができる力を育む

２　わかば教室の支援・指導の基本方針

「わかば教室」の主な活動（4 つの柱「個に応じた教育活動」「豊かな体験活動・スポーツ」「教育相談」「個別支援の記録」）を通して支援・指導を行う

（１）児童・生徒一人一人に合った進度で学習を進め、基礎学力を身に付けさせる

（２）体験活動を取り入れそれぞれの活動を通して自立のための支援を行う

（３）児童・生徒の「よき相談相手」「よき学び相手」「よき触れ合い相手」になって指導する

（４）教育相談を継続して行うための個別の支援記録を作成する

（５）在籍校・保護者と連携し、本人の学校復帰を支援する

３　わかば教室の生活

日　課（令和 4 年度生活時程）

9：20～　朝の会（連絡等)・読書 9：30～　学習タイム 1・2（各 40 分） 11：10～　学習タイム 3〔わかばタイム〕（50 分） 12：00～　昼食・昼休み 13：00～　清掃(火・金) 13：15～　学習タイム 4・5（各 30 分） 14：30～　帰りの会（翌日の連絡等）	※学習タイムは、国語、算数（小)・数学（中)、英語（小中）を中心とした学習と、わかデミー(学習支援)、e ラーニングの時間 ※わかばタイム・昼食・ミーティングの時間は小学生・中学生合同で実施 ※個別面談（相談）は児童・生徒の状況により生活時程の中で行う

４　入室・退室の手続き

（１）入室の手続き

①　保護者が、学校や教育委員会、発達・教育支援センター（エール）等に連絡するか、又はわかば教室に直接申し込みをして「見学」と「入室相談」をする。

②　児童・生徒と保護者が入室を希望する場合、体験通室を段階的に経た後「入室願」を在籍校の校長に提出する。校長は、入室が適切と判断した場合「入室申請書」を作成し、保護者から提出された「入室願」を添えて日野市教育委員会に提出する。

③　教育委員会が承認すると「入室許可書」が発行され、入室が決定する。

（２）退室の手続き

①　保護者が「退室願」を在籍校の校長に提出する。

②　校長は、「退室申請書」を作成し、保護者から提出された「退室願」を添えて、日野市教育委員会に提出する。

③　教育委員会が承認すると、退室が決定する。

Ⅲ　令和４年度の通室利用

１　入室児童・生徒の推移（各年度２月末人数）

（１）令和元年度から４年度の入室児童・生徒数の推移　（人）

年　度	小学生	中学生	合　計
令和元（2年2月29日現在）	22	69	91
2（3年2月28日現在）	14	48	62
3（4年2月28日現在）	23	55	78
4（5年2月28日現在）	32	58	90

（２）令和４年度の入室児童・生徒数の推移

令和４年度	小　学　校						計	中　学　校			計	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年		1年	2年	3年		
4月30日	0	1	1	3	4	4	13	1	10	15	26	39
5月31日	1	1	1	3	4	4	14	3	12	16	31	45
6月30日	1	2	2	3	4	6	18	3	13	16	32	50
7月20日	1	2	3	3	4	6	19	4	13	17	34	53
8月31日	2	2	4	3	4	6	21	4	15	17	36	57
9月30日	2	3	4	3	5	7	24	5	17	18	40	64
10月31日	2	4	4	3	5	7	25	7	17	21	45	70
11月30日	2	4	4	5	5	7	27	8	17	22	47	74
12月31日	2	4	4	6	5	7	28	8	20	23	51	79
1月31日	2	4	3	8	5	8	30	9	21	24	54	84
2月28日	2	3	5	9	5	8	32	12	22	24	58	90

２　「わかば教室」に入室する児童の長期欠席の要因・背景

児童・生徒の登校できない主な要因・背景は、友人関係、委員会・部活動等学校生活に関わること、教員との関係、学業不振、生活習慣への不適応、身体的・精神的・心理的要因等本人自身に関わること、親子関係、家庭内環境、入学・進級・転校時の不適応、現代の社会的環境等複合的なケースが多い。（入室時の面談より）

３　「わかば教室」の教育活動

児童・生徒一人一人の抱える課題を観察・面談等で把握に努め、個別の支援・指導計画を立て、指導員が共通認識を図りながら支援・指導している。また、個々の生活・学習・面接等の様子を記録・共有をすることで、以後の支援・指導・相談に生かしている。

今年度も他の通室生との関わりができない児童・生徒がいたため、教室の使用法やグループ編成の工夫などをし、個々に応じた支援・指導・援助ができるよう努めた。

（１）体験活動

年間を通して児童・生徒が体験活動に参加することを通して、楽しく充実した時間を共有することで人間関係を深め、自己肯定感や成就感がもてるように行事を計画し実施した。

今年度、実施した行事は、次の表の通りである。また、「わかばタイム」を午前中の最後の「タイム３」の時間帯に設け、ことば、スポーツ、音楽、栽培、図工を曜日ごとに行った。いずれも『ヒト、モノ、コト』に関わる活動や体験活動が必要と考え、異年齢で協力し成し遂げ成就感も味わえるように、児童・生徒の実態を考慮しながら実施した。

令和4年度のわかばタイム

曜	時間帯	内　容
月	T3	ことば
火	T3	スポーツ
水	T3	音　楽
木	T3	栽　培
金	T3	図工・美術
T3　＊11:10～12:00 T4･5＊13:15～14:25 小学生は 14:00 まで		

令和4年度に実施した行事

月	内　容
4 月	春の遠足（多摩動物公園）
5 月	スポーツ大会
6 月	図書館訪問
7 月	避難訓練、収穫祭
8 月	美術鑑賞教室
9 月	
10 月	社会科見学（都埋蔵文化財センター）
11 月	学習発表会、平山陸稲脱穀体験
12 月	収穫祭、スポーツ大会
1 月	新年を祝う会(書初め、百人一首)
2 月	
3 月	卒業・進級を祝う会、お楽しみ会

① 学習発表会では、児童・生徒が授業やわかデミーで取り組んだ学習の成果を展示発表した。陶芸・折り紙・藍染・コンピュータグラフィックス・スライドショーなどが展示された。児童・生徒は、いろいろな学年の人の作品を見て驚いたり、感心したりしていた。また、自分の作品が展示されていることをとても喜んでいた。今年は動画での活動の紹介も多くあり、普段の活動がよく伝えら

れた。

②「図書館訪問」では、高幡不動の図書館に徒歩で行った。図書館員の方から図書館の説明を受け図書館について知ることができた。また、「お話会」を通して本の面白さと朗読の素晴らしさを感じ、本を読むことの楽しさを知ることができた。実際に本を借りる活動も行った。「また来たい。」という声が児童・生徒からも聞かれた。

③「美術鑑賞教室」では、東京富士美術館を訪問した。静かな空間でじっくりと絵画や彫刻などの展示物を鑑賞することができた。事前に展示品について学習したことで興味をもって真剣に作品を観ていた。企画展示では、ムーミンの直筆原画なども鑑賞した。

④「社会科見学」では、都埋蔵文化財センターを訪れた。多摩丘陵で発掘された遺跡や復元された昔の住居などを見学した。また、昔使われていた道具を使って火起こし体験をした。なかなか火がつかなかったが友達と協力して火をつけられたときにはとても喜んでいた。

（２）学習指導（支援・指導）

①成績不振が原因で登校できなくなった児童・生徒もいれば、長期欠席となったために学習に遅れが生じた児童・生徒もいる。そのため、学習の目的も「分かるようになりたい。」「学習の遅れを取り戻したい。」「高校入試のため。」等様々である。そこで児童・生徒一人一人に応じて、基礎的な学習の支援・指導に努めた。

②小学生は午前の学習タイムに国語・算数・英語及びｅラーニング(週２回)を活用した学習を行い、授業の中で個々の状況に応じて個別指導を行った。また、ＳＳＴの時間には、ゲーム的な活動をしたり校庭や体育館で活動したりするなど、楽しく取り組める活動を展開した。

③中学生は国語・数学・英語の３教科を中心に学習した。一斉授業を行うこともあるが基本的には個別学習（個別支援）である。ｅラーニングを活用した学習は火・木の週２回行い成果をあげている。中学３年生は進路（受験）に向けて書類作成の支援や作文指導・面接練習も行った。

④わかデミー(学習支援)は自分が学びたいことを自分で考えて決める(自主性・主体性を育てる)のが目標の時間である。今ここでしかできない学びを進める時間となっている。

⑤教室（授業）に入れない児童・生徒は、別室で一人一人の習熟の状況に応じて、時間割や教材を用意して指導に当たってきた。分かるところから始め、意欲を高め、学力を向上させるように努めた。

（３）ＳＳＴ（ソーシャル・スキル・トレーニング）

自己認知スキル、コミュニケーションスキル・社会的行動が身に付けるためのトレーニングをしている。具体的にはゲームやエンカウンターワークシートを使って、自分の考えや他の人の意見を聞き、自分自身を客観的に見つめる場面を作っている。

また、他者とのコミュニケーションが苦手な児童・生徒が多い中で、少人数でのグループトークも行っている。この時間を楽しみに通室してくる児童・生徒も見られた。

（４）ｅラーニング

ｅラーニングは火曜日と木曜日の週２回行っている。一人一台のＰＣやタブレット端末を使い「ミライシード」や「プログラミング」、「タイピング」などに取り組んでいる。その日の自分の状態や気分に合わせて活動内容を決めて取り組めることもあり、参加できる児童・生徒が増えた。また他の児童・生徒の興味や関心をもち、やったことのない課題に挑戦する姿も見られた。上級生が下級生に PC やタブレット端末の操作を教える場面もあり有意義な時間となっている。

（５）生活指導

通室している児童・生徒は、心理的不安、人間関係の不安や悩み、生活リズムの乱れ、ゲーム依存、家庭環境等様々な課題を抱えている。これらの諸問題を改善できるように、今年度は次の目標を設定し支援・指導に当たってきた。

《子供たちの生活目標》

「自他を尊重」

「命を大切に」

《 生活指導目標 》

＊夢や希望をもたせる

＊基本的な生活習慣を身に付け、自ら行動できる力を育てる

＊相手の気持ちを考え、人を大切にする心を養う

＊健康な体を作る

＊安全指導を徹底し、事故防止に努める

目標達成のために、所員・指導員は常に報告・連絡・相談を行い、児童・生徒に対して共通認識を図りながら指導に当たり、一人一人の個性・特性・可能性を伸ばすように心掛けた。

週１回のミーティングは通室生の情報交換と支援のステップや日常生活の改善指導、学習、行事への取組、安全指導等について検討した。また、対人関係における適切な言葉遣いや関わり方についてのＳＳＴ活動をカウンセラーの支援を得て行ったことにより、コミュニケーションを取り、挨拶や適切な言葉遣いができるようになった通室生が増えてきた。

４　「わかば教室」の教育相談活動

（１）児童・生徒の教育相談のねらい

①心理的に安定し、継続して「わかば教室」に通うことができるようにする。

②友達や先生（所員・指導員・カウンセラー）を信頼し、人と関わる楽しさを知る。

③目標を立てて、主体的に活動し、自分に自信をもち、自己肯定感を高める。

④学校復帰についてのステップを共に考える。

（２）保護者との教育相談のねらい

①児童・生徒の生育歴や、家庭や学校での状況を把握しながら、長期欠席となった経緯や要因を理解する（場合によっては、保護者のカウンセリングも行う）。

②児童・生徒をどのように成長させていくかを共に考え、個々の状況に合った学校復帰の方法を考えていく。

（３）教育相談の方法

①初回面談の実施（担当所員）：対象の児童・生徒と保護者に対して「わかば教室」について説明し、保護者に面接票に記入してもらい、学校へ登校できなくなった経緯や生育歴及び今後についての考え等の聞き取りを行った。

②定期的な個別面談（カウンセラー）の実施：児童・生徒の状況に合わせ、週に１回から

月に１回位の割合で 30 分から１時間程度の個人面談を行っている。また、相談スケジュールを毎月作成して、職員が確認できるようにしている。児童・生徒に対しては面接終了時に次回の日程の確認・調整を行い、計画的に実施した。

③随時の個別面談（カウンセラー）の実施：集団活動に参加できない児童・生徒から個別に話を聞いたり、活動の相手をしたりすることで徐々に集団活動への参加を働きかけた。また、指導員との関係作りを手掛かりに２～３人の小グループ、同学年グループ等、少しずつ人間関係が広がるよう支援した。通室が安定しない児童・生徒には電話や手紙で連絡し、面談を計画するなどして本人が通室できる環境づくりに配慮した。

④保護者面談（カウンセラー）の実施：保護者から依頼があった場合や通室生の状況に応じて行っている。来室の機会がもてない保護者には電話連絡で対応している。

⑤児童・生徒の教室内での様子や、面接での様子、学校その他関係機関での児童・生徒の様子を把握し、所員・カウンセラー・指導員が個別の指導・支援について検討し、共有することで、後の支援・指導や日常の活動への対応に生かしている。

⑥夏季休業中には、タブレット端末を活用して定期的にオンラインで面談や学習の支援を行った。

（４）教育相談の成果

①初めは人と関わることに不安や抵抗を示していた児童・生徒が、指導員・カウンセラー等との関わりの中で徐々に信頼感をもつことができるようになり、他の児童・生徒とも関わる機会が少しずつ増えてきた。

②人と関わることに苦手意識のある児童・生徒も、行事やスポーツ・ゲーム等を通して指導員、仲間と過ごすことで徐々にコミュニケーションが取れるようになっている。さらに人と関わることで、自分に自信をもち人に対する信頼感をもてるようになってきている。このことが、通室の継続につながっていると考えられる。

③相談を通して自分自身を振り返り、自分の良い面に気付き、自信をもてるようになってきている。また、自分自身の課題にも気付くようになってきた児童・生徒もいる。

④学校復帰の可能性が見え始めた児童・生徒に対しては、スモールステップで復帰まで支援を行った。学校や保護者・関係機関と相談・協議しながら、児童・生徒をそれぞれが支えることで復帰につながりつつある通室生もいる。

⑤個別の支援・指導方法を考え、指導員やカウンセラーがそれぞれの立場から意見を出し合い、児童・生徒を多面的に捉え分析・共通認識することで、その児童・生徒に合った支援・指導を行うことができている。

（５）今後の課題

①わかば教室に、学校、発達・教育支援センター（エール）、病院及び他の機関からの紹介で来室するケースと、保護者が自ら探して来室するケースなど様々な経緯があるため、初回見学時のアセスメント（学校で頑張れそうか、わかば教室で受け入れ対応すべきか、一般教育相談や特別支援教育、医療機関における対応の方が適しているか等）が今後の支援を見立てる上で重要である。

②わかば教室でエネルギーを蓄えることができても、学校に復帰することが難しい現状がある。学校のリソースルームやステップ教室・保健室・相談室の利用や、放課後に登校して担任の先生と面談すること等、部分登校に努力する姿が見られる通室生について、

在籍校の教室で過ごすことは大きな一歩である。一方、クラスや部活動の中に話せる友達がいることが、児童・生徒にとって大きな励みになる場合もある。今後も復帰の方法や段階について保護者や学校及び関係機関と連携・協力することが必要である。

③児童・生徒の成長や学校復帰の実現のために保護者及び学校との相談、学校（担任・養護教諭等）との連携が必要である。そのために、保護者と面談や連絡が取りやすい関係づくり、そして長期欠席児童・生徒に対する学校の理解と適切な対応がより期待される。

５　学校・家庭・地域・関係機関との連携

（１）学校との連携

①児童・生徒の通室状況と学習や行事・生活等の活動状況を在籍校に毎月報告した。また、学校での指導状況を報告書で返信してもらうことにより、指導の充実を図った。

②学期に１回「わかば教室連絡会」を開き、在籍校の管理職や担任等と情報交換を行った。平成 27 年度から、全体会１回、個別会（学校別）２回の形態で実施している。児童・生徒の活動状況の参観の要望には随時対応し、相互理解や連携に役立てた。

③校長（副校長）・特別支援教育コーディネーター・担任等と随時電話連絡や面談を行った。

④わかば教室と学校間では、毎月「通室状況報告書」を作成し、相互の連絡を通して、情報の共有化を図り、個々の児童・生徒への指導に生かしてている。

（２）家庭との連携

①保護者会を年３回実施した。児童・生徒の教室での様子や家庭での様子について相互に知る機会となり、児童・生徒に対するよりよい支援を考える機会とした。

②月１回発行の「わかば通信」を配布し、児童・生徒の活動の様子を知ってもらうと同時に、行事への参加を呼びかけてきた。

③保護者との面談、電話連絡を適宜実施し、保護者との相互理解を深め、連携・協力して児童・生徒の課題の改善に努めた。

（３）地域との連携

①スクールカウンセラー連絡会、子ども家庭支援センター運営委員会に参加し、登校できなくなっている児童・生徒への理解や対応について相互理解を深めるようにした。

②地域の施設や機関の協力を得て、体験学習や地域との交流を図った。

（４）関係機関（一般教育相談係、ＳＳＷ、登校支援コーディネーター等）との連携

①登校支援コーディネーター及び発達・教育支援センター（エール）のＳＳＷ（毎週１回電話）と必要に応じ情報交換を行い通室生への対応（支援・指導）に役立てた。

６　わかば教室における指導の成果と課題

（１）成果

①児童・生徒に見られる変容

・元気な挨拶や返事、発言が見られ、指導員とも良好な関係を築くことができてきた。

・指導員やボランティアと行う遊びやスポーツ活動で体力も付き、自分の気持ちや感情も穏やかに表現できるようになってきた。

・小集団活動やＳＳＴで、友達との挨拶や会話ができるようになり、学習タイムにも参加し「わかば教室」の時程に沿って行動できるようになってきた児童・生徒もいる。

・学習や行事に参加することから通室回数も増え、自信をもった児童・生徒が見られ、共に楽しみ合う姿も見られるようになってきた。
・朝、在籍校に登校してから通室したり、「わかば教室」で活動してから登校したり児童・生徒や、定期テストを在籍校で受ける中学生の姿が見られた。

②学校・家庭・関係諸機関の本教室への理解、連携、協力に見られる成果

・今年度も、ＳＳＷの働きかけや登校支援コーディネーターの情報により、閉じこもりがちであった児童・生徒が通室するようになった事例が見られた。
・個人差はあるが、安定して通室できるようになったことから、部分登校する児童・生徒や学校復帰しようとする児童・生徒も見られた。

（２）課題

①支援や指導により児童・生徒がエネルギーを回復するとはいえ、友達関係や学習への不安は大きく、児童・生徒の思いを大切にしながら在籍校、家庭と連携して支援していくことが大切である。

②通室する児童・生徒（体験通室生含む）の増加に伴い、個別指導の部屋や指導員の不足により、多様なニーズへの決め細やかな個別支援に困難な状況があった。現状の実践を見直し、さらに工夫、改善していくことも必要である。

③通室を始めても、家庭生活実態等で通室日数が減少してしまう児童・生徒もある。この場合は、子供に対するカウンセリングや保護者との面談が必要である。

④精神的な課題をもった子供も多く、カウンセラーが個別に対応しなければいけない事例が多くあった。

⑤今年度は小学生の通室が多く、小中学生が一緒に学びを深めるために工夫が必要だった。

⑥入学時、就学相談の結果がほぼ尊重され、特別支援学級へ進級した児童・生徒も通室している。進級後、不登校になりわかば教室に通室する例があることも課題の一つである。小学校から中学校への進学にあたっては各学校で作成する「かしの木シート」等の個別の支援計画を活用して互いの連携をより緊密にする必要がある。

Ⅳ　健全育成に関わる事業

「相談部」の業務は、わかば教室に通う児童・生徒の生活改善指導、進路指導（特に進路に関する情報収集と生徒への資料の提供）とともに、教職員や保護者との学校生活上の相談である。今年度実施した健全育成の業務に関わる具体的内容は次のとおりである。

１　登校しぶり、登校できない生徒の進路指導の支援

（１）公・私立高等学校、サポート校、通信制の学校等の資料収集、学校案内資料の収集と通室生への情報提供等に努めた。

（２）在籍校（担任等）、保護者と連携を取りながら、進路指導（情報提供・書類作成・作文指導・面接練習）に対する支援を行った。

２　わかば教室の児童・生徒の健全育成に関わる支援

（１）通室している児童・生徒が在籍している小・中学校の生活のきまりとわかば教室の生活のきまりを基に生活面や行動面での支援・指導をしてきた。

（２）学校生活相談係の事業は、今後も様々な「健全育成」の課題にこたえていかなければならない。各種不適応行動や特別支援に関わる課題の相談も多くなってきている。学校

及び関係機関と今まで以上に協力・連携して支援をしていくことが不可欠となっている。

Ⅴ　登校支援としてのｅラーニングを活用した学習支援

１　固定時間

（１）　火・木曜日　10:20～11:00　小・中学生の合同授業

（２）　水曜日　　14:00～16:00　個別のｅラーニング（予約制）

２　活動場所、使用媒体

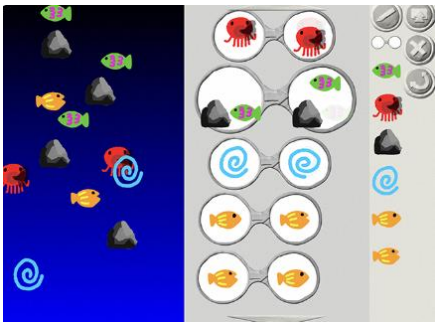
パソコン室にある、パソコンや昨年度より導入されたタブレット端末を使用して、教育センター２階のパソコン室にて実施する。

３　活動内容

○タブレット端末内にある学習ソフトを使用し個別の教科学習を行った。

学習ソフト内にある、ドリルを使用し、自分で選んで課題に取り組んだ。学年や教科も自由に選ぶことができる。

○プログラミングの学習を行った。



左：自分で描いた絵を動かします。
右：ブロックを適切な順番に並べて組み合わせ、キャラクターや絵を動かします。

○タブレット端末のドキュメント等を使用した。わかば教室で実施している栽培学習のための記録表や看板、野菜の育て方、学習発表会や収穫祭等の行事のための掲示物の作成を行った。

・キャベツを収穫するときは
結球を手で押し出すようにして
株元に包丁を入れ芯を切って収穫
します
収穫適期を過ぎたキャベツは結球
が割れてしまって
腐ってしまうこともあるため
適期が過ぎたら早めに収穫しま
しょう。

アブラナ科野菜　害虫

1 ヨトウガ

ドキュメントを使用し、キャベツの収穫方法や害虫をまとめ、栽培の授業でみんなに発表しました。

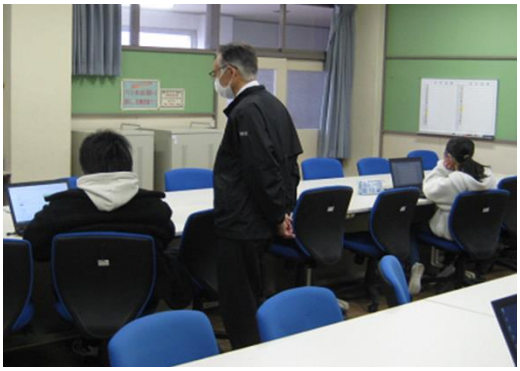
〇ペイントやタブレット端末の描画ソフト使用し、絵を作成した。
〇タイピングの練習を行った。

左：回転ずしのように課題が出ます。
右：1 分間でどれだけ多くのポップコーンを召喚できるかに挑戦するゲームです。

4　児童・生徒の様子

児童・生徒はその日の自分の体調や気分によって、自分で取り組む課題を決定し、自分のペースでその課題に取り組んだ。また、周囲の児童・生徒が行っている課題を参考にするなどして、自分の課題を決めて行うなど、児童・生徒同士の関わり合いも見られた。

今年度はタイピングに取り組む児童・生徒が多かった。過去の自分の得点と比較したり、他の児童生徒と得点を競う場面も見られた。また、わかば教室での他の授業や行事のためのポスター作成や調べ学習などに取り組む児童・生徒も増え大変充実した時間となった。



編　集　後　記

令和４年度日野市立教育センター紀要「第 19 集」を発刊する運びとなりました。

教育センターは、学校や教員に児童・生徒への郷土教育に必要な資料の作成や情報の提供、理科授業に必要な教材、実験・実技の向上につながる指導・助言、教材の提供、機材の貸出、研修等を行い、特に若手教員には授業力や学級経営力向上につながる授業観察・助言等の支援を行い、微力ながらも日野市の学校教育の発展に尽くしてきました。

わかば教室では、通室する児童・生徒一人一人の教科の習熟度や進度等によってきめ細やかな学習支援を行い、教室の様々な行事を通じて社会性を育んできました。加えて、一緒に学ぶことが難しい児童・生徒の居場所となれるよう努めてきました。

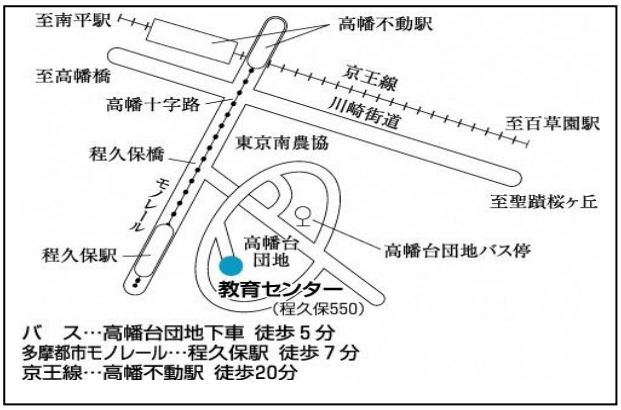
現在、教育センターでは、調査研究部・研修部・相談部の三つの部で事業を行っております。今年度の事業内容及び成果をお知らせするため、本紀要としてまとめました。

ご高覧いただければ幸いです。

今年度、日野市立教育センター事業及び、本紀要の発刊に関して温かくご指導・ご助言いただきました関係各位に厚くお礼申し上げますとともに教育センター事業にご支援・ご協力いただいた地域の皆様、わかば教室の関係者の皆様、市内の各機関の皆様方に心より御礼申し上げます。

＜編集委員＞

編集長（教育センター所長）	長　﨑　将　幸	
統括指導主事	馬　場　章　夫	
指導主事	宮　崎　友　和	
事務長	田　中　　勉	
教育センター所員	千　葉　　正	須　藤　昭　人
	尾　形　　斉	森　本　友　明
	竹　山　弘　志	大　類　研　治
	高　橋　清　吾	池　本　ユウ子
	沼　田　忠　晶	

日野市立教育センター紀要
第 19 集

発行日	令和５年３月 31 日
発　行	日野市立教育センター
	所長　長　﨑　将　幸
	〒191-0042　日野市程久保 550
TEL	042-592-0505
FAX	042-592-1148
E ﾒｰﾙ	k-center@city.hino.lg.jp
URL	https://www.hino-tky.ed.jp/center/